
光と闇の先にあるもの

みなみ緋奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇の先にあるもの

【Nコード】

N0063Y

【作者名】

みなみ緋奈

【あらすじ】

荒んだ未来から幕末に飛ばされた主人公。
そこで新撰組の面々に出会い、三番組隊長
斎藤一と心を通わせて行くが……
二人の想いは通じ合うのか？

序章

2XXX年。地球の有限資源をほぼ使い果たした人類。

深刻な水不足、食糧不足が、天変地異による地震や洪水、

世界人口はピーク時の三分の二以下程に減った。

だが代替となるエネルギーを手に入れ、人は存続していた。

その代替エネルギーを見出したが、当時4歳だった孤児の少女。

その技術は急速に世界に広がったのだ。そしてその少女の才能を買ったのが、

当時の桜間家当主だった。

もともと財閥だった桜間家は、この技術とは他に、この少女の技術開発で、世界のトップに立った。

「当麻——！！」

叫び声に近いとも言える呼び声で、廊下を走りながら部屋の扉に立つと、

バンッ！

と扉が開く音と共に、一人の女性が部屋に飛び込んで来た。

「当麻！！！！何！！！！これ！！！！パーティーの類には出ないって、何度も言ってるだろ！！！！」

「お前は相変わらず、全く・・・騒々しい。その言葉使いも改めなさいと」

「うるさい。黙れ。当麻」

煌びやかなドレスを途中まで着せられたであろう格好で、

優雅に座りながらコーヒーを飲む当麻の胸倉を掴みながら、

「あんたも本当、しつこい！」

「仕方あるまい。今夜のパーティーは女性同伴と」

「ウザイ。当麻。私、行かないから」

そう云うと、着かけていたドレスを脱ぎ捨て、下着姿になるとそのまま、部屋を出て行ってしまった。

「全く・・・誰が育てたんだか」

呟く当麻の傍で、代々桜間家に仕えている雲菱が

「御当主かと」

「私では、ない」

短い会話を済ませると、何事も無かったようにまたコーヒーを飲み

始めた。

この桜間家に引き取られて17年。

孤児だった少女は、21歳になり、桜間家の当時の当主、当麻の父親は既に逝去して今は、

息子の当麻が家を継いでいた。

下着姿のまま部屋に戻る途中の廊下で、慌てて彼女を追いかけてきたのは、

世話係の桜庭慎司。

彼女のその姿を見るや「雅様！！そ、その格好はどうしたんですか！！」

「ムカつくから、脱いだ」

「ぬ、脱いだって！だ、駄目ですよ！！そんな格好でお屋敷内を歩いては」

「何かさ・・・慎司最近、当麻みたいに、口煩くなってきた・・・」

「もう！！そんな事を言っていないで、部屋で服を着て下さい！目のやり場にこまりますから」

「はいはい」

面倒臭そうに部屋に戻るなり、雅が着替えた服は運動をするために

着る服だった

「雅様？その格好は？」

「ジェイムスの所へ行ってくる」

「え？ジェイムスさんの所にですか？ですが、今日はパーティーが・
・・」

「あ、それは当麻に断ったから」

「え？」

バックに必要な物を詰めると、慎司が詳しい事を聞く間もなく、屋敷の出口に向かい、

エネルギーバイクに乗ろうとする雅に

「雅様！一人は危険です！！“また”何かあったら！！」

「大丈夫だよ、慎司。そうなくても無事に帰ってきてるでしょ？」

ニコツと笑うと、慎司が止める前に走って行ってしまった。

幼少の頃から、その頭脳を欲しがる人間が群がり、誘拐、拉致が何度あった。

その為、武術から射撃、刀、空手、カンフーなどありとあらゆる、護身術を身に付け、

それだけではなく、乗り物全般の操縦もマスターしていた。

それらは脱出際に必要とされる可能性がある為、身に付けておく必要があった。

そして腕は、殺し屋以上の腕前。

彼女に刃向い本気で雅が戦えば、死があるのみ。

実際、何度か連れ去られた際、そのメンバーを死に至らしめている。

彼女の身体能力は、通常の人間の遥か上にあるのだ。

軍隊仕込みの人間であろうと、敵わない。

バイクを10分程走らせ、ジェイムスの家に着くと、その住人のように門をくぐり、

「ジェイムス！！久々に振りに来たぞ！！」

大声で叫ぶが、姿は見えない。

敷地内にある道場に足を踏み入れるが、やはり姿はない。

踵を返そうとした時

「やあぁっ！！」

雄叫びと共に、白銀がキラリと光るが刹那、雅の姿は消え、声の持ち主の背後に立ち、

頭に人差し指を押し当てていた

「残念〜ジェイムス」

楽しそうに云う雅の相手はこの家の主の“ジェイムス”

日本人ではない彼は、古き良き日本をこよなく愛して止まない、日本歴史オタクであり、

雅に剣術指南をしている。

現存している流派のほとんどの免許皆伝を持ち、その腕はお墨付きだが、

雅はその上を行ってしまっていた。

「くうー！！またでござる！！やられたでござる！！」

「あのさ・・・その“ござる”可笑しいって・・・」

「いえ！武士を魂で感じるには、言葉使いも必要でございまする」

「・・・わかった、わかった・・・でも私の前だけ、普通でお願いしたいんだけどさ・・・私に勝てないんだし」

「くうー！！分かったでござる」

「それより、久々に逆刃刀で交えない？そのために来たからさ」

「OK!!準備してくるね」

雅は真剣の逆刃刀で剣を交えるのが好きだった。

怪我をする事はお互いの技量で滅多にないが、真剣という本番さながらの緊迫感が、

現場に役に立つからだった。

序章 2

それからしばらく、ジェイムスと剣を交えた雅は少し休憩をとって、ジェイムス宅を後にした。

（まだ時間あるな・・・本も持ってきているし、あの場所で時間を潰すか）

バイクを走らせ向かった場所は、樹齢千年とも云われている、大きな桜の木がある場所だった。

昔は沢山あったと言われている桜の木も、他の木々同様に枯れ、もうあまり残っていない。

そして元は国の土地だったここを、

「自由に出入りできるように、しておいた」

と、いつの間にか当麻が買い上げたのだ。

「まあ・・・確かに、それまでは不法侵入だったけど、わざわざ買い上げなくてもさ・・・」

だが、当麻の気持ちを素直に受け取る事にした。

いつものように木の麓に腰を下ろすと、持ってきていた本を取り出し、その世界に入っていく。

雅が持っているのは、昔ながらの紙で出来ている本で、今ではもう

珍しい。

本と言う類は、既に電子化され、木から作られる紙の本が売られる事はない。

だが雅は、この紙で出来ている本が好きで、昔の本を手に入れ、

その味わい、紙の手触り、匂い、インクの文字にまたその香りが、

“本”というその知識の重さを味わえる気がして、好きなのだ。

そして初夏の風が吹く桜の木の下で、本を読みながらウツらウツらと、

現実と夢の境目を行き来し始めた頃、

「……た……なら……たす……ら……れ……
昔の……に……」

（誰か……いる？この声は？）

境目で彷徨っていると

「……様……！雅様！」

肩を揺さぶられて目を開けると、慎司が少し怒ったような顔で、雅の顔を覗き込んでいた

「もう……！やっぱりここに居たんですね……！ジェームスさんに連絡したら、もう帰ったって聞いたのに、まだお屋敷に戻って来られな

かったんで、心配したんですよ！」

「心配性だな・・・慎司は・・・」

「もう！！当たり前です！！雅様に何かあったら、生きて行けません！」

そう言いながら、ふと雅の本に目をやり

「また、この本を読んでいたんですか？」

「うん。昔は沢山の緑が世界にあって、動物や虫がいて、生命で満ち溢れてさ。どうして、こうなったんだろうつてさ・・・」

「ですが、緑は着々と増えていると思いますよ。当麻様も、雅様の気持ちを知ってらっしゃるから、

緑化には力を注いでいるんだと思いますよ。それに、雅様の研究の成果は、目覚ましい進展を遂げているじゃないですか」

「そうかな・・・あの当麻がねえ・・・」

「さあ！！帰りましょう！！パーティーは出なくていいので、屋敷に戻って来いとの、当麻様からのご伝言です」

「はいはい。分かったよ。それより、誰かと一緒に来た？」

「え？僕一人ですが？」

「そうか・・・さて！帰るか！！」

（やっぱりアレは夢か・・・だけど、リアルに耳に残ってる・・・）

帰り際、何故か後ろ髪を引かれる思いで振り返ると、

サワサワと風の音と共に揺れる桜の木があるだけだった。

屋敷に帰り、軽く夕食を済ませると

「慎司、メカ室にいるから」

「はい。わかりました」

慎司に居場所を伝えると、屋敷の隣にある、建物に移動した。

当麻が仕事場から帰らない雅を心配して、屋敷にいても仕事が出るようにと建てた・・・

そう慎司が言っていた。

（わざわざ建てるか・・・全く・・・）

部屋に入ると、依頼されて造りかけの機械を仕上げる為、手先を動かしながら、

人工頭脳 a i と共同作業で進めて行く。

完成した頃には、深夜を過ぎ雅は一度、部屋の隅にあるソファで寝る事にした。

まだやらなければならない事は、山ほどある。

ショートスリーパーである雅は1〜3時間も睡眠すれば十分だった。
目を閉じてしばらくすると

(・・・暗い・・・痛い・・・まただ・・・)

目隠しをされ、体の自由は効かず、ただ何処かの倉庫に隠されている自分。

周りからは数人の声が聞こえる。

「こいつの頭脳は、世界中が欲しがってた！一番高値を出した所と取引だ！」

「まさか、こんなに簡単に行くなんてな！笑いが止まらねえ！あははは！」

(・・・またか・・・助けを待つより、自分で逃げた方が早いかな)

耳を澄まし、人の気配、声で人数を確認する

(1・・・2、3、・・・5、6・・・確認できるのは6人。多くて10人ってところかな)

あっと言う間に、縛られていた体を自由にすると、自分を捕えたであろう人間を、次々に倒していく。

バキッ！

「ぐはっ！！！」

「な、なんだ！こいつ！！う・・・わあー！！！」

ヒュンッ！

赤い閃光を出しながら、放たれた銃の光が、壁に当たった。

「た、助けてくれ！！！」

コメカミ辺りを両手で包み込むようにあてる。

バキッ。

その音を最後に室内は静かになった。

「はあ・・・はあ・・・夢・・・」

初めて人を殺した時の夢。

今まで何度か連れ去られ、逃げる為に、狙う人間を排除する為、生きるため、数人殺めた。

仕方が無かった。でもこうして、たまに夢に見るのだ

「汗・・・シャワーでも浴びよう・・・」

部屋を出て、屋敷に入る前に、中庭へ向かうことにした。

ベンチに腰を掛け、背もたれ一杯に体重を掛け、首を上に向けると、星が瞬いている

「……昔の光……」

そして雅はあの歌を口ずさんだ。

「またアメージング・グレイスカ」

「当麻」

「夢でも見たのか」

「何で？」

「まあいい。国からの依頼の物は出来たのか？」

「ああ出来た。今、渡そうか？」

「いや、明日の朝で構わない」

「……当麻」

「何だ」

「私って、どうしているのかな？」

滅多に弱気な所を見せない雅に、少々驚きながらも

「死にかけていた世界を救ったのはお前だ。その技術で、我々は生

き残る事ができた」

「だから？」

「何を弱気になっている。雅らしくないぞ」

「別に弱気にはなっていないし。そうか・・・死にかけた世界ねえ・・・死は生の裏側。両者は表裏一体。言い方を変えれば、生の表側が死。生きたいという執着は、時には死を招き、死にたいという欲求は生を招く事もある・・・」

「何が言いたい」

「別つに――さて！シャワー浴びて、もう一仕事するわ。当麻も仕事あるんですよ。早く寝なさい」

「お前に言われたくない」

「私はショートスリーパーだから、いいんだよーだ。じゃお休み」

「雅」

「何？」

「・・・どこにも行くなよ」

「はあ？ここにいるでしょうが。それに、私には行く所なんて無いじゃんクスクス。じゃあね」

屋敷に戻って行く雅の背中を見つめながら、当麻は暫くその場に留

ま
っ
た。

序章 3

雅が去ったあと、雅が腰かけていたベンチに座り、

嫌な予感を抱えながら、少し考えていた。

雅とは3つ違いの当麻は、7歳の時に急に父親が引き取った

雅と暮らすようになった。

あまり話す方ではなく、一人の世界に入り込んでる事が多い、

そんな少女だった。

そして何より、初めて屈辱、絶対に敵わない相手がいるとも、この時思い知らされた。

どんなに勉強しようとも、雅の頭脳には追いつく事も出来なかったからだ。

なら、経営者として成功すればいい。

頭脳でも使い方は人様々なのだ。

父、学校、家庭教師、全てから帝王学を学びそして、雅という頭脳の味方と、

経営手腕で世界一の企業に育て上げた。

そして自分が帝王学を学んでいる間、

国の特別な許可を得た雅は、幼くして医学を学び博士号を取得。

その他、物理学、地理学、宇宙理論学など様々な多くの博士号を取得し、

その頭脳は世界一になった。

だがそれを狙う、企業、国、テロリストは多く、

これまでの間に何度か危険な目にあっており、

その為に取得した自己防衛の方法で、人を殺している。

初めて雅が、自分を捕えた者を殺したと聞いた日、暗い部屋の隅で蹲り、

アメイジング・グレイスを歌っていた。

繰り返し、繰り返し……

「お前を命の危険にさらした者のために、許しを乞う必要などない」

そう云っても”死”が来るたびに、あいつはアメイジング・グレイスを謳う

「全く馬鹿な奴だ」

そしてさつき、久々に口ずさむ雅を見た時、妙な胸騒ぎが起きた。

それが何かは当麻自身も分からない、漠然とした物。

「あいつの居場所は、俺の傍にしか無い……」

自然が好きな雅の為に、作り上げた中庭。

そこで当麻らしくもない妙な不安の中、雅を思っていた。

翌朝、メカ室で作業をしていた雅は一旦切り上げ、朝食を取る為、屋敷へ戻った。

「おはようございます！雅様。今までお仕事でしたか？」

少し心配そうな顔をしながら慎司が挨拶をしてくる

「まあね。いつもの事だし、そんなに心配しなくていいよ。それより、当麻起きてる？」

「はい。朝食をとられています」

「ありがとう」

そのまま、無駄に広いダイニングへ入り

「当麻、はいこれ」

「朝の挨拶もないのか」

「おは」

お前は・・・まあいい。これは例の物か？」

「そうそう。国から依頼されてたやつね。確かに渡したから。あと今日はちよつと出掛けるわ」

「なら昨日みたいに一人で出歩かず、羅門か慎司を連れて行け」

「えーーーーー！！やーーーーだーーーー」

すると横から慎司が

「もう！！我が儘言わないでくださいよ！何かあったらどうするんですか！

僕が付いていきますから！」

ブスつとした顔をしながら不貞腐れていると

「行き場所だけ教えろ」

あまり雅の行き先を尋ねる事が無い当麻だったが、

昨日から感じている言い知れぬ不安が、

彼の口を動かした

「珍しいな？当麻がそんな事聞くんだ。桜の所だよ。
今日は夕方までそこに居たいんだ」

「あまり遅くなるな」

「・・・何か今日の当麻・・・キモッ!!」

「うるさい！飯を食え！時間ができたら、今度こそみっちりお前を仕込んでやるからな」

「あははは！！有り得ないし！！」

そして朝食を済ませると雅は軽くシャワーを浴び、やりかけの仕事をするため、

今度は部屋に籠った。

昼過ぎ、慎司に声を掛け例の場所を出掛けた。

慎司は何故かピクニック気分なのか、軽食やらを準備している

「え〜〜つと・・・慎司くん？どこへ行くのかな？」

「折角ですから、ピクニック気分で軽食を用意していきますね」

「別に、ピクニックへ行くわけじゃなくてさ・・・まあいいか・・・」

「そう言えば、時間があれば当麻様が立ち寄られると、言っただけで済んだ」

「げ！マジ！じゃあ、それまでに退去だな」

「もう！！当麻様は雅様を大事に思っているからこそ、心配なんで

すよ……」

「慎司くん？気持ち悪い事言わないでくれるかな？」

目が笑ってない笑顔で慎司を睨み

「だ、だって……」

そして慎司をからかいながら、門に止めてある車に乗り込んだ。

桜のある場所に着くと、慎司はテキパキとティーセットやら、敷物を出しながら、

せわしなく動いている

（一人でゆっくりしたいんだけどな……）

その様子を見ながら、いつもの木の根元に腰を下して本を開いた

「あ！折角、敷物あるんですから、敷いて座ってはとうですか？」

「いい、このままが好きだからさ」

クスツと小さく慎司は笑うと

「分かりました。何かありました、呼んでください。邪魔はしませ
んので」

「ありがとう」

そして何度も読んでいるあの本を広げ、本に没頭した。

だいぶ時間が立った時、ふとずっと疑問だった事を慎司に聞いてみたいと思った

「慎司」

「はい」

「ちょっと聞きたい事があるんだけど」

「何ですか？」

「もし、人が自然を壊さず、共存できるように時間を歩んでいたら、世界は今とは全く違っていたはず。始まったんだろっかって……」

頭に人差し指を付け、考えるポーズをとりながら

「そうですね……江戸時代？幕末でしょうか。そこから明治と
は入り、
近代化進んできましたから。」

「幕末ねえ……好きじゃないかも。ありがとう」

「いえ」

短く話を終わらし、本に目を向けながら睡魔が襲ってきた雅は、
木にもたれ掛ったまま眠りに落ちた。

序章 4

そしてまた、夢と現実との狭間で、あの声が今度はハッキリと聞こえた

「あなたなら、変えられる。待っていました。お願いします。皆を助けてください・・・その為に・・・」

ハッと目を覚ますと、慎司しかおらず、

「また・・・変な夢」

「あ！雅様。目を覚まされましたか？当麻様があと数分で、こちらに来られるそうです」

（なんだろう・・・この前といい、今と言い。こんな風に自分は寝る事は無いのに・・・）

「雅様？」

「あ・・・うん。当麻ね。うん」

「はあ・・・本当にお体は、大丈夫ですか？」

「大丈夫、大丈夫。ゴメン」

そんなやり取りをしていると、当麻の車が自分たちの乗って来た車の横に停車した。

運転手が甲斐甲斐しく扉を開くと、当麻が姿を現した。

雅が座っている前に立つと

「迎えにきてやったぞ」

「来てやったって……頼んでないだろう……」

「お前ぐらいだな。この俺の有難味が分かってないのは」

「あんたって本当、馬鹿だよねえ……はぁ……」

既に帰り支度を済ませた慎司が、車に荷物を積んでいる。

「わかった……帰るよ……」

手を当麻が差伸べてきたが

「いい。先行って」

「……」

そう答えると、車に向かって当麻は歩き出した。

雅も座って居た場所から立ち上がると、車に向かって歩き出した。

数歩、歩いたところで

「「お願いします……」」

あの声が聞こえて振り返る。

「今・・・私、起きてるよな？」

そんな事を思いながら、桜と向き合っていると、空は急に赤くなり始め、

禍々しく変化し始めた。

「え？何？！！」

でも、目も開けられない程の風が吹き、桜の緑葉が舞い散る。

そして、一斉に桜の木に蕾がなり、花が咲き乱れた。

後ろからは当麻の急かす声が後ろから聞こえてくる。

だがそれを聞きたる事が出来ず、

息苦しさを覚えながらと体の軋むような痛みで、気を失ってしまっ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0063y/>

光と闇の先にあるもの

2011年11月12日18時11分発行